

平成30年6月25日現在

機関番号：32682

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K16988

研究課題名(和文) ポスト革命期フランスにおける「行政の専制」の生成とその構造の思想史的研究

研究課題名(英文) A Structural Analysis of Administrative Despotism in Post-Revolutionary France

研究代表者

高山 裕二 (TAKAYAMA, Yuji)

明治大学・政治経済学部・専任准教授

研究者番号：90453969

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、民主主義諸国に生じる専制としての「行政の専制」の構造を理論と実例の両面から分析した。具体的には、フランス第二帝政下で書かれたアレクシ・ド・トクヴィルの『アンシャン・レジームと革命』(1856年)とその草稿を分析するとともに、ナポレオン3世の政策とその理念を考察した。

その成果として、民主的な権力の集中が生じるのは、政治制度(大統領制)や行政組織(官僚制)と同時に、あるいはそれ以上に、経済状況とその政策によるところが大きいことを明らかにした。特に、それが従来言われてきたような財政出動型ではなく(あるいはそれと両立するかたちで)経済自由型になりうることを理論的・実証的に解明した。

研究成果の概要(英文)： In this study, I analyzed the structure of “Administrative Despotism” both theoretically and empirically through examining the policies of Napoleon III and its principles as well as reading Ancien Regime and the Revolution by Alexis de Tocqueville and its working manuscripts. As a result, this study identified three elements of the democratic centralization of power: presidential system, bureaucratic organization and economic policies. Furthermore, it cleared that the key element is the economic principle that would balance administrative centralization with economic liberalism.

研究分野：政治学・政治思想史

キーワード：行政の専制 ポナパルティズム トクヴィル フランス第二帝政 デモクラシー ポピュリズム

## 1. 研究開始当初の背景

近年、議会制民主主義への不信が深まるなかで、議会に対する行政や指導者個人の権限を強化しようとする動き(大統領制化)が見られ、今後それが専制化する可能性も否定できない。この点に関連し、政治学の分野では主に制度や選挙研究の蓄積が進んでいるのに比して、思想史研究では個別の思想家の研究を超えてほとんど進展がないように思われる。その大きな原因として、先行研究の三つの欠陥(あるいは偏重)が指摘できる。

(1)第一に、暴政概念への偏重があった。ポスト革命期 フランス革命が勃発する1789年から第二帝政の崩壊する1870年までの後、代議制民主主義の確立期にはいると、民主主義から一時的に逸脱した暴力的・抑圧的な体制を指す暴政(tyranny)が好んで用いられるようになり、一時的でも暴力的でもない、被治者の「同意(民衆的支持)」に基づいた支配というニュアンスを持つ専制(despotism)の概念の意味が見失われた。しかも冷戦終結後、旧共産主義圏や第三世界の独裁体制を批判する概念として改めて注目されたのも「暴政」だった(Chiro, 1994)(Boesche, 1996)。

(2)第二に、自由主義研究への偏重があった(Jaume, 1997)。近代民主主義のうちに潜在する(一時的/例外的ではない)危険として、「行政の専制」を最初に鋭く指摘したのは、復古王政期(1814-30年)に登場した王党派(保守主義者)だったが、自由主義に偏重した思想史研究では、その議論はほとんど注目されなかった。同時に、その議論を継承、発展させたアレクシ・ド・トクヴィル(1805-59年)の思想のうち『アメリカのデモクラシー』(第一巻1835年、第二巻1840年)への偏重が見られた。確かに同書で「行政の専制」を指摘したことは有名でその指摘は注目を集めてきたが、しかしその注目は従来ハイエクラをはじめ主に経済的側面に基づいていた、それは『アンシャン・レジームと革命』のなかで発展させられたのである。本書は、フランソワ・フユレのようなマルクス主義史観を論駁する修正主義者の影響もあって1980年代以降注目されるようになるが、それはあくまでフランス革命史学においてであった。

(3)第三に、フランス第二帝政、そのボナパルティズムに対するマルクス主義研究への偏重があった。従来マルクス主義が支配的な歴史学において、ボナパルティズムは過渡的・例外的な独裁と断じられ、経済的な側面民主政治に固有の問題としてではなく

が注目されてきた。それは、ボナパルティズム批判として書かれた『アンシャン・レジームと革命』の「行政の専制」論の同時代史のかつ実証的な研究が妨げられる原因にもなった。結果として、思想的かつ理論的なその研究も蓄積されてこなかったのである。しかし、例えば(Anceau 2000)(Price 2001)など、近年の政治史研究が明らかにしつつあるように、それは近代の行政国家 システム を形成する試みであると同時に、民主主義国家に固有の独裁でもあったとされる。

## 引用文献

Chiro, Daniel, *Modern Tyrants: the Power and Prevalence of Evil in Our Age* (Macmillan, 1994).

Boesche, Roger, *Theories of Tyranny: From Plato to Arendt* (Pennsylvania State University Press, 1996).

Jaume, Lucien, *L'Individu effacé: Ou le paradoxe du libéralisme français* (Fayard, 1997).

Anceau, Eric, *Napoléon III: un Saint-Simon à cheval* (Tallandier, 2008).

Price, Roger, *The French Second Empire: An Anatomy of Political Power* (Cambridge University Press, 2001).

## 2. 研究の目的

本研究では、民主主義国家において行政権力が専制化する過程とその構造を、フランス革命後の専制の理論と現実を踏まえて思想的に解明することを目指す。

(1)第一に、西洋政治思想史における専制の概念を整理するとともに、ポスト革命期における行政的集権の危険を最初に論じた復古王政期フランスの保守主義者の専制論を検討する。

(2)第二に、第二帝政の「行政の専制」を念頭に置いて書かれたトクヴィルの『アンシャン・レジームと革命』とその準備草稿を、その同時代的背景を踏まえて丹念に読解する。

(3)第三に、議会に対する執行権力の優位を確立した第二帝政の支配体制(ボナパルティズム)を多角的に検討することで、トクヴィルの見落とした「行政の専制」の構造的特徴を実証的に明らかにする。

## 3. 研究の方法

本研究では、トクヴィルの『アンシャン・レジームと革命』の草稿の丹念な読解が計画の中心となる。そのための工夫(準備作業)として、第一に、専制の概念史を整理し、第二に、復古王政期の保守主義者の専制論を検討し、トクヴィルの議論への影響とその相違を明らかにする。第三に、第二帝政の支配構

造を、歴史学や文学の研究成果を用いてより具体的・体系的に把握し、トクヴィルの専制論の不備を実証的に補完する。一年目は、専制の概念を用いた思想家のテキストを古代から近代まで検討・整理し、またフランス革命後に専制を論じた保守主義者の著作・冊子を検討する。また、トクヴィルのテキストの草稿の読解に着手する。二年目は、草稿の読解を継続する一方で、ルイ＝ナポレオン自身の著作を検討する。三年目は、ボナパルティズムを近年の先行研究も十分に踏まえて実証的に分析し、「行政の専制」の構造を明らかにする。

#### 4. 研究成果

本研究の成果は、大きく分けて3点ある。  
(1)第一に、専制の概念史を整理し、トクヴィルのデモクラシー論における「専制」概念の特質を明らかにしたことである。古代ギリシアから近代フランスにいたる「専制」概念の持続と変容を、様々な思想家(アリストテレスからホップズ、コンスタンまで)のテキストの分析を通じて明らかにした。また、トクヴィルの専制論が概念史の系譜を継承していることを確認する一方で、それを生成させる民主的な論理と心理を明らかにしたところに彼の議論の独自性があることを指摘した。その成果は、論考「自由のないデモクラシー トクヴィルの「行政の専制」概念」として発表した〔下記〔図書〕〕

(2)第二に、ルイ＝ナポレオンの統治思想の性格を明らかにしたことである。ナポレオン三世の著書以外に、彼の著作集(1856年刊行)所収の諸論考や政策(特に大統領令)を分析すると同時に、フランス第二帝政のプレーンと言われるミシェル・シュヴァリエの政治経済思想を総合的に分析することで、そのサン＝シモン主義としての性格を明らかにすることができた。具体的には、財政出動型の社会政策を実施する一方で、貿易自由化のような経済的自由主義を推進するという一見矛盾するような政策が行政(執行権力)の集中という観点からなされていたことを解明した。この成果の一部は共同研究の成果であり、共編著『共和国か宗教か、それとも 十九世紀フランスの光と闇』として公表した〔下記〔図書〕〕

(3)第三に、トクヴィルの『アンシャン・レジームと革命』の準備草稿および未完の第2巻の原稿の読解を上記の作業と同時に進めた結果、トクヴィルがボナパルティズムの行政の専制の構造をその経済理念 その起源はポリティカル・エコノミーにあるとされる に注目しながら理論化した過程を跡づけることができた。そして、ナポレオン三世の統治思想(ボナパルティズム)の分析とともに文章化し、行政の専制の理論と実例両面からの分析を公表に向けて整理すること

ができた。今後、この成果を国内外で公表することで、政治学における民主国家における専制論あるいは大統領制の議論に対して理論的・歴史的に貢献することが期待される。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1件)

高山裕二、見えざる宗教：社会思想史における宗教の可能性？、社会思想史研究、2018、近刊

〔学会発表〕(計 1件)

高山裕二、社会思想史における宗教、社会思想史学会、2017

〔図書〕(計 3件)

高山裕二他訳、白水社、ポピュリズム：デモクラシーの友と敵、2018年、202

高山裕二他、法律文化社、逆光の政治哲学、2016年、260

高山裕二他、白水社、共和国か宗教か、それとも 十九世紀フランスの光と闇、2015年、305

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年：  
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

高山 裕二 (TAKAYAMA, Yuji)

明治大学・政治経済学部・准教授

研究者番号：90453969

(2)研究分担者

( )

研究者番号：

(3)研究協力者 ( )